

マルコの福音書 10 章 35－45 節「贖いの代価」

1. 序論

「贖い」という言葉、教会に初めて来た方や教会に来始めた方にとって、あまり馴染みがないかもしれませんが。しかし「贖い」は私たちの救いにおいて、なくてはならない、本当に重要なことです。

2. 本論

2-1 仕えられたい弟子たち

今日の箇所は、イエスさまがエルサレムに上られる直前の出来事です。エルサレムに上るということは、イエスさまが十字架にかかれる時が近付いているということです。

このとき弟子たちは、イエスさまの十字架と復活の意味を十分には理解していませんでした。むしろイエスさまのことを、自分たちの国を復活させてくださるお方としか見ていませんでした。ですから、見当違いのことをイエスさまに頼みます。イエスさま、あなたがこれからつくられる新しい国において、あなたの右と左に置かせてください、と。ヤコブとヨハネが頼んでいることは要は、「自分を偉い立場に置かせてください」という願いでした。

ヤコブとヨハネの行動を聞いた、ほかの十人の弟子たちは腹を立てました。「腹を立てた」というのは、この十人の弟子たちもヤコブとヨハネと同じ思いを抱いていたということに他なりません。

私たちは、この弟子たちの姿を笑うことができないでしょう。「仕えられたい」と望んでしまうのは、まさにこの世では当たり前のことです。

2-2 「仕えられるためではなく仕えるために」来られたイエス

イエスさまは 42 節で、この世の原理を語ります。支配者は横柄にふるまい、偉い人たちは権力をふるう。しかし、43 節・44 節と「皆に仕える者になりなさい」「皆のしもべになりなさい」とイエスさまは語ります。人々に仕えるのがあなたがたの生き方だ、とイエスさまは語ります。

そして、その理由・根拠になるのが 45 節です。神であり、人であるお方がこの世に来られたのは「仕えられるためではなく仕えるため」だと言います。この世の考え方とは全く異なります。イエスは仕えるために来られた。では、それは具体的にはどういうことかといえば、続く後半です。「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

2-3 「贖いの代価」とは

「贖い」は罪を犯したときに使われる言葉です。罪を犯したとき、その罪は必ず罰せられなければなりません。犯した罪を解決する方法は、刑罰で罰せられることしかありません。罪を犯したのであれば、必ず罰せられなければなりません。自分以外の他の誰かが、自分が本来受けなければならなかった刑罰を、代わりに受けてくださる。それを「贖い」と言います。

そして、この箇所では「贖いの代価」と呼ばれています。奴隷を解放するためのお金を意味しています。奴隷が解放されるためには、それに見合ったお金が支払われなければなりません。奴隷が解放されるために、奴隷の代わりに支払うお金。それが「贖いの代価」です。

では私たちにとって「贖いの代価」が何か。それは神の御子イエスさまのいのちです。イエスさまのいのちが支払われたからこそ、私たちは罪の奴隷状態から解放されることが出来ます。イエスさまがご自分のいのちを捨てて、十字架で血を流されて、私たちの代わりに罰せられました。私たちが本来受けなければならなかった刑罰を、代わりに受けてくださったから、私たちは罪から解放されることが出来ます。

私たちが覚えなければならないのは、自分で自分の罪滅ぼしをすることはできないという事実です。自分以外の誰かが、自分の身代わりになってくださらなければなりません。自分で自分の罪滅ぼしをすることができるなら、それは救いではありません。自分の力ではすることができないことを、他の誰かがやってくくださる、だからこそ救いと言えます。

3. 結論

この贖いの恵みを受け取る方法が一つだけあります。それは、イエスさまが自分のために、身代わりになって死んでくださったことを信じることです。イエスさまは十字架にかかって、私たちの身代わりになって死んでくださったからこそ、私たちの罪の問題は解決されました。イエスさまは私の罪を贖ってくださるお方であることを信じるならば、罪の問題は解決されます。

イエスさまによって贖われたからこそ、私たちはしもべとして歩むことができます。イエスさまによる贖いの恵みに感謝し、しもべとして歩む幸いを覚えさせていただきたいと願います。